

## 尾高一郎先生との一勝一敗

十七回生 高橋 一三

人間誰でも遠い昔の事を不思議にはっきりと覚えている事が一つや二つはあるものだ。

それは千里第二小の四年生か五年生の頃、即ち昭和十八年か十九年ではなかったかと記憶している。当時、男子だけの組を雪組、女子だけを月組、男女混合を星組と呼んでいた。そして雪組の担任は尾高先生だった。恐らく今七〇歳代から八〇歳以上の年代の卒業の方なら、あゝあの厳しく恐い先生という印象で記憶に残っているのではないかと思う。確か旧制茨木中学を出られた筈だ。

今でもあるだろうが、当時夏休みの宿題という嫌なものがあった。殆んど生徒は、長い夏休みだからその中に、その中にと先延ばしにし、八月末頃になってからやっと何んとかせんといかんというのが当たり前であった。その時の宿題は、今でいう「自由研究」といった類のものだったのだろう。私はこの種の題目

が一番の苦手、特に理系のことが。日一日と夏休みの残りは少なくなっていく。何とかごまかしてでもでっち上げねばならない。

私は兄一人、姉三人の五人兄弟の末っ子だった。兄の小学生時代の参考書のような本が家にあった。そこに何か種になるようなものはないかと頁を繰っている。小鳥の動作について書かれているのが目に止まった。雀のような小鳥は、歩く時鶏等のように足を右左と交互に前に出すのではなく、びよんびよんと両足を揃えて跳ねるように進むとあった。これを読んで恰も自分がそれを観察したように書いて出した。後日、先生は教室の生徒全員の前で、私の名前は挙げずに、「参考書を写して書いた生徒がいる」と言われた。私は内心「しまった」と思った。

こんな事があって、翌年の春休みか夏休みの時、毎度の事ながら中々これといった題材が浮かばない。四苦八苦のあげく、自然現象の雨はどうして降るのかといった大それた事を考えた。先ずビーカーの中に水を入れ、その下にろうそくの火を置き、中の水を沸騰させる。やがてその上に置いたガラス片に水滴が付く。これが冷えて下に落ちるのが雨であるというのだ。こ

れを実験らしい事は何もせず、全て実験をしたような見せかけの図迄書いて出したのだ。

今度はこれが大成功。皆の前で先生からお褒めの言葉までいただいた。これで最初の雀が一敗で、後の雨が一勝という訳である。(完)

## 尾高先生の色々

編集部

高橋さんの寄稿文がきっかけで、次々と他の方からもコメントや文章、写真を頂きました。引き続き、それらをご披露させて頂きます。

十八回生 寺澤 美代子

(編集部)

1999年11月6日、大崎にオープンしたニューオータニイン東京のホテルで、第3回千里山会の総会・懇親会が開催されました。

その会には、尾高先生の奥様で、十七回生の女子(4年月組)を担当された尾高幸子先生(旧姓岸野)が、十七回生のお招きで出席されました。会誌 3号参照

朝礼の後、台の上の尾高先生の号令と太鼓の音に合わせて運動場を行進していたこと、その号令の掛け方が怖い感じだったこと、を鮮明に覚えている。

当時は戦時色が強まりだした頃で、私は家族疎開で大阪市内より引っ越して転入したばかり。転入前の市内の学校は割にのんびりしていたので、大変な学校に転校したと思った記憶がある。